

The Tale of Genji をめぐって

小田桐 弘子

はじめに

『源氏物語』とはじめに出会ったのは、小学校の四年生の教科書だったと思う。

いくら思い出そうとしても、ほかのことはあまりはつきり思い出せないのに、「雀の子をいぬきが逃がしてしまいました」の、伏籠ふせごの中に置いて逃げないようにしてあったのに^①というこの条だけが、頭に残っている。この言葉をいった幼い女の子は母親が亡くなって、祖母の尼さんに育てられている可哀想な子という説明があったような気がするが、それ以上は思い出せないでいる。長じてのち、これが「若紫」の巻の幼い時代の紫の上の言葉と知り、また与謝野晶子訳によるものと知った。原文では「雀の子をいぬきが逃がしつる。伏籠のうちに籠めたりつるものを」^②とある。

中学の「国語」の時間では、先生はしっかりと朗読を勧められた。「国語」の授業でこれは本当に素晴らしいことで、必要なことであろう。朗々と声を出して、よく読むと、文章の美しさに魅かれて、何度も何度も読むと、意味を考えてしまい、暗唱できてしまう。反復練習し、暗唱を勧められるのは、英語の授業でも、要求されるし、大切で必要な勉強方法であろう。この何年か教育実習などで、中学や高校訪問することが多く、授業参観して、思うこ

とであるが、朗読や暗唱を生徒にあまりさせていないように思われる。何故であろうか、理由はいろいろあるであろうが、日本語であろうと、英語であろうと、文章を声にだして味わわせることの意味を考えたい。

『源氏物語』との意識的出会いは中学三年生の「国語」の授業であった。「桐壺」の巻の次の一節である。

野分立ちてにはかに肌寒き夕暮の程、常よりもおぼし出づること多くて、ゆげいの命婦といふを遣はす。夕月夜のおかしき程に出し立てさせ給て、やがてながめをします。^②（以下省略^③）

中学の「国語」の教科書では、本文の前にその前の部分の説明がされていたので、前後関係や『源氏物語』全体について、中学生相応に理解していたように思い出される。なによりも「野分け立ちてにはかに肌寒き夕暮の程……」という文章の流れのよさに、感じ入った。さすが、『源氏物語』の最初の読者は読んだのではなく、語られたものを聞き入ったのであろうという説をさもありなんと、中学生なりに感服しながら、暗唱・朗読にふけたことが、なつかしい。ただの嵐ではなく、「野分」という表現にも大和言葉の現実描写的で、かつ美しいなどとも、中学生なりに妙に感心した。

作者の紫式部については、正月の恒例の家庭的遊びとして欠かせない、百人一首の歌留多でおなじみであった。「めぐりあひて」の歌人が『源氏物語』の作者ということなど日本文学史の作者・作品などが、知識のなかで結びつき、整理され一層の関心を育んでくれた。

同じく高校生の頃、海老蔵（先代団十郎）が光源氏を演じた、歌舞伎座の舞台を観た。船橋聖一の脚色であったが、「夕顔」の巻の舞台で、美しい夕顔の前に物怪が出てくる場面の確か深く、暗いブルーの照明が今も浮かびあ

がってくる。『源氏物語』に対する関心はその後大学では英文科に進学して、しばらくは途切れた。ふたたびよみがったのは、大学院に進学を決めた頃であった。学部卒業後十年近くになっていた。その頃の関心は大学英文科の頃、福永武彦先生の講義でうかがった「比較文学」にあった。大学院では比較文学を専攻したいと思い、そのための基礎的語学を独学でこころみはじめていた。日本文学を大学で正統的に学んだわけではないので、大学でつかわれる教科書などを取り寄せて、読むことにした。試行錯誤している時に、偶然手にした上智大学で出版している『モニユメンタ・ニッポニカ』をみた。この書は外国人による英語でかかれた日本研究の論文集であった。すでに知識としてわかっている日本文学の作品論や日本史の事柄など、新鮮で興味をひいた。そうだと、ひらめき、英語やフランス語でかかれた日本研究をできる限り読み、大学院受験に備えた。その頃の読書の一つに Arthur Waley 訳の *The Tale of Genji* があった。

正宗白鳥が原文では「須磨源氏」のあたりで、本を放り出してしまいうけれども、ウエーレー訳の方が読みやすいと知っているというようなほめた批評をしている事は何かで読んでいた。一九六〇年代の研究論文の英語表現になれていた私には、Waley の文章はあまりにも流麗すぎたのである。英文による雅びともいえる Waley の世界は、勉強を急ぐ私にはまどるっこしく感じられて、「須磨源氏」までもいかず、他の書や論文集に移った。

「英訳源氏」への誘い

一九六八年大学院に入り、偶然にもキリシタン文学研究者の柘教授から、伊吹和子氏に紹介された。当時、伊吹氏はサイデンステッカー先生から『源氏物語』英訳のお手伝いをする人をさがしてほしいと頼まれていた。早速お目にかかり、すでに完了していた「宇治十帖」を渡された。サイデンステッカー先生は当時、手にはいったテクス

トを使用したといわれたので、私も同じテキストを用いた。このことについて後に二冊にわたり全訳・出版された第一の巻の Introduction に次のように記されているので、参考のため引用する。

This translation has been based chiefly on the text in the Nihon Koten Bungaku Taikei series, the uniform edition of the Japanese classics published by the Iwanami Shoten. The editor, Professor Yamagishi Tokubei, has used a manuscript copy from the Muromachi Period in the Aobyōshi or “Blue Book” line of texts, deriving ultimately from the work of Fujiwara Teika, the great poet and scholar of the twelfth and early thirteen centuries. Two other texts, both with detailed commentary and complete rendition into modern Japanese, were regularly consulted: the *Genji Monogatari Hyōshaku* (Annotated *Tale of Genji*) of Professor Tamagami Takuya, and the Shogakkan Text, only some two thirds of which had appeared when this translation was completed, under the editorship of Professor Abe Akio, Akiyama Ken, and Imai Genei. Both are based upon Aobyōshi manuscripts. Three other modern translations, by the poetess Yosano Akiko and the novelists Tanizaki Junichirō and Enchi Fumiko, were consulted from time to time.^④

サイデンステッカー先生の手になる the first draft “初稿”は、いままでもなく、現在上梓されて、ペーパーバックスにもなっている翻訳とはちがっている。日本文学研究者として、当時の日本の「源氏研究」にかかわる文化史的研究などもあたらられて、英語表現で表しうる限り逐語訳的によくされたのが、the first draftであったといえよう。英訳が刊行されてから、日本人の古典研究者の方々から逐語訳されていないという批判が私にまで、申立てられる

ことがある。そのような時、ふと、思うのは、大変に僭越であろうけれど the first draft が一ありえないことであろうが―出版されていたら、そのような日本人読者はやや満足されるかもしれないと……………。

サイデンステッカー先生がどのように『源氏物語』翻訳ととりくまれたかは、Genji Days (一九七七年)、邦訳『源氏日記』(安西徹雄訳、講談社 昭和五十五年)に詳しく述べられている。それによると、先生がはじめに本格的に『源氏物語』に手をつけられたのは一九六六年のことだったようである、と記されている。すでに述べたように、私はじめて翻訳の初稿をお預かりする二年前である。『源氏日記』の最終年月日は一九七五年で、初稿が完成したのは一九七三年の九月だった、という。その間、ちょうど川端康成氏のノーベル賞を受賞されて関連する仕事に追われて、「源氏」から離れていたこともあったとのことである。『源氏日記』の初めに記している居場所も東京、アナーバー、ホノルルと飛び、「源氏物語」も旅している。わたくしもこれにつれて、率直に読み、考えたことを書き記して、終了した初稿を各地に送った。

すでに拙著(『横光利一*比較文学的研究』(一九八〇年)と『横光利一―比較文化的研究―』(二〇〇〇年)のあとがきに記している)ので、繰り返しは避けたいが、サイデンステッカー訳を読み通すことは、かつての大学院受験のための英語やフランス語の研究論文を読みふけた頃とはちがった。自分自身にとっては、責任を感じつつも、原本もいろいろあり、青表紙本と他のテキストとのちがいなど、山のような源氏学にふれ本当に学び、源氏研究の歴史と面白さにひかれていった。中でも、玉上琢弥『源氏物語評釈』はテキストの読み方、扱い方はいかに及ばず、「桐壺」の巻の注釈部には「長恨歌」が記され、比較文学的視野をも拡げていただけた。また、学派をこえて多くの源氏学者の論及が引用・紹介され「玉上評釈」を読む楽しさにひたった。従来いっていた、国文学の研究論文は難解が良しとされているのかという、意地悪な皮肉な感想を確実に破ってくれた。最近のはやりの表現をすると、

難解な「言説」に悩まされずに、「玉上評釈」はこれまた、読みやすいサイデンステッカー訳と読者である私の読書感覚とを直接に結びつけてくださった。

私の役割についてサイデンステッカー訳の Introduction に次のようにご説明くださっていることを記して、この稿を閉じ次章に移ることにする。

Miss Odagiri Hiroko read most of the translation in first draft, comparing with the original and pointing out errors and omissions. Professor Ikeda Tadashi did the same with the chapters not scrutinized by Miss Odagiri, a half dozen or so towards the end. I am very grateful to them indeed. If there are the errors and omissions in the finished translation, they probably crept in later—it must be emphasized that Miss Odagiri and Professor Ikeda saw the first draft, and these things will creep in during the process of rewriting. ⑥

翻訳のつれづれ

およそ、三十年余り前のことをふりかえっても、Seidensticker's Genji の初稿を読むことによって、私自身の古典の勉強になり、古典を読む楽しさを実感させて頂けた。既述の岩波の『古典大系』、他のテキストや参考文献等にも広く当りあの時代までの源氏研究の幅・奥深さもやや知ることができた。『晶子源氏』『谷崎源氏』『円地源氏』も三種を机上に並べて、一行一句比較してみた。比較文学研究法の Explication de textes により、味読・熟読の実際を経験した。あらためていうまでもないが、現代語訳の三者がそれぞれまったく違っていて、これもまた興味深く、

原本との違いを示すものであった。限られた枚数の小論ではそのすべてを提示できないので、一例のみをあげてみよう。「薄雲」の巻からである。

この巻は大変にドラマティックな出来事や、「春秋論争」でも話題性に富んでいる。源氏の君が三十一歳の冬から三十二歳の秋までのやく一年間の出来事が記されている。重病にかかっていた藤壺入道宮が亡くなり、源氏の君は深く悲嘆にくれる。一方、冷泉帝が帝の実父は源氏の君であることをしらされる巻である。巻名「薄雲」の由来は、「藤壺の死に対して、源氏にへ入日さす峰にたなびく薄雲は物おもふ袖に色やまがへる」の一首があり、又源氏が泣いて居る時、山ぎわの梢に夕日が当ってへ雲の薄く渡れるが鈍色なるを云々との文があるのによつた。^⑥

歌人と謝野晶子は『全訳源氏物語』のすべての巻に巻頭歌をおいている。これらの歌を読むと、個々の巻にはいろいろな事件が起きているが、晶子はその巻で主たるトピックスは何を読みとったかを、巻頭歌で示している。

さくら散る春の夕べのうすぐもの涙となりて落つる心地に

巻中の、この歌の背景を晶子訳により紹介すると、「源氏は二条の院の庭の桜を見ても、故院の花の宴の日のごとが思われ、当時の中宮が思われた。へ今年ばかりは（墨染めに咲け）とくちずさまれるのであった。」^⑦と訳している。「乱れ髪」の歌人は全物語の巻頭「桐壺」の巻頭歌として、「紫のかがやく花と日の光思ひあはざることわりもなし」と、堂々と禁じられた恋心を肯定した歌で飾っている。晶子の『源氏物語』に寄せる思いがはっきりと、示されているといえよう。さて、私が関心をもち、読み比べをおこなった箇所を引用してみる。病床に臥す藤壺入道の宮を息子の冷泉院がお見舞し、話している場面である。初めに、(i) 原文 (ii) 晶子訳 (iii) 谷崎訳、(iv)

田地文字訳、続いて、(v) Arthur Waley 訳、最後に (iv) Seidensticker 訳の順番で記してみる。ルビ、振り仮名や挿入語は省略し、また漢字は新字体に変えている。

(i) 三十七にぞおはしける。されど、いと若く、盛りにおはします様を、「惜しく悲し」と、見たてまつらせ給ふ。「つゝしませ給ふべき御年なるに、はれぐしからで、月頃過ぎさせ給ふことをだに、なげきわたり侍りつるに、御つゝしみなどを、つねよりことにせさせ給はざりける事」と、いみじうおぼし召したり。たゞ、この頃ぞ、おどろきて、よろづの事、せさせ給ふ。月ごろは、常の御悩みとのみ、うちたゆみたりつるを、源氏の大臣も、深く思し入(り)たり。限りあれば、ほどなくかへらせ給ふも、悲しき事おほかり。宮、いと苦しうて、はかぐしう物も聞えさせ給はず、御心のうちに、おほしつゝくるに、「高き宿世、世の栄えも並ぶ人なく、心のうちにあかず思ふ事も、人にまさりける身」とおほし知らる。うへの、夢の中にも、かゝる、事の心を知らせ給はぬを、さすがに、心苦しう、見たてまつり給ひて、「これのみぞ、うしろめたく結ばれたる事」に思しおかるべき心地し給ひける。^⑧

(ii) 今年は三十七歳でおありになるのである。しかしお年よりもずっとお若くお見えになってまだ盛りの御容姿をお持ちあそばされるのであるから、帝は惜しく悲しく思召された。お厄年であることから、はつきりときれない御容体の幾月も続くのをすら帝は悲しんでおいでになりながら、そのころにもつとよく御養生をさせ、熱心に祈禱をさせなかつたかと帝は悔やんでおいでになった。近ごろになってお驚きになったように急に御快癒の法などを行なわせておいでになるのである。これまではお弱い方に又御持病が出たというように解釈して油断のあったことを源氏も深く歎いていた。尊貴な御身は御病母のもとにも長くはおとどまりになるこ

とができずに間もなくお帰りになるのであつた。悲しい日であつた。女院は御病苦のためにはかばかしくものお言われになれないのである。お心の中ではすぐれた高貴の身に生まれて、人間の最上の光榮とする後の位にも自分は上つた。不満足なことの多いようにも思つたが、考えればだれの幸福よりも大きな幸福のあつた自分であると思召した。帝が夢にも源氏との重い関係をご存じでないことだけを女院はおいたわしくお思ひなつて、これがこの世に心の残ることのような気があそばされた^⑨。

(iii) お歳は三十七におなりなのでした。ですが非常にお若く、今が盛りにお見えになります御様子を、帝は可憐しくも悲しくも覧遊ばされます。「お年廻りがお悪くていらつしゃいますのに、とかく晴れ晴れとなさらないで月日を送つておいでになると聞きましただけでも、お案じ申していたのでした。御祈禱なども、そう特別におさせにならないでいらつしゃるとは」と仰せになつて、たいそうお氣遣い遊ばすのでした。ようようこの頃に慌てて御修法や何やかやとおさせになります。この月頃はいつものおん悩みなのであろうと氣を許していた源氏の大いにも、深く御憂慮なさるのでした。

限りのあることなので、ほどなく還幸なさいますにつけても、悲しいことが多いのでした。宮はひどく苦しめて、はきはきとももの仰せられませぬ。お心のうちに思いつづけ給うと、尊い宿運、この世での榮華も並ぶ人がなく、胸のうちに際限もなく物思ひをすることも、人にまさっている我が身であつたことがお分りになるのです^⑩。

(iv) 女院は今年三十七におなりになつていた。しかしまだ大そうお若く、盛りの美しさにお見えになる御様子を、帝は惜しくも悲しくも覧になる。お慎みになるべきお年まわりでいらせられる上、ご気分もすぐれずこの何ヵ月かをお過しになられたのさえお心にかかつていたのに、御精進や御祈禱なども特に遊ばされな

かつたとは………と帝はあまりのこととお嘆きになるのであつた。ただこの頃になって、急に驚いてあらゆる加持、祈禱などおさせになる。この日頃は、常の御病弱とばかり油断していたのであるが、源氏の大
臣も深く心を傷めていられる。行幸には定めのあることなので、しばらくお見舞の後に帝はお帰りになつた
が、それにつけても悲しいことが多かつた。

宮は大そうお苦しくて、はかばかしくはものもおつしやれない。お心の内でお思いつづけになると、前世からの宿縁に恵まれて、高い位につき、この世での榮華も並ぶ人はないほどであつたが、また心に秘めて、ついに満たされぬ思いも人には増さつていたこの身であつたと、しみじみお思い知りになるのだった。

* あの若い日に、藤壺の御簾や几帳に紛れながら何ごころもなく自分にまつわつて来た世にも麗しい皇子………天つ空から仮に降り下つて来た天童のように光り満ち、匂い満ちて清浄、無垢に輝いていたあの少年は、いつか物思いのおびただしすぎる若人の姿に變つて、ある時は枝を露に撓められた桜の花群のような悩ましさに頸を重らせ、ある時は精悍な隼のようにまつしぐらにねらい撃つ勁さ烈しさの悲しみに怯えて、羽ぶるいながら自分を捕え、揺すぶり、二つを一つにして見知らぬ境に連れ去つて行つた、二人はたしかに一つのもの變つて、幻の世界にいた、でも私はただ一言も、あの人に言葉で許すとは言つていない。私はいつも何かを楯にしてあの人を避け、とうとう避けとおして命を終る日まで来てしまった。言わなかつた私自身はあの人のうちに生きていられるであろう。それでも私はそれを言葉になし得なかつた運命が辛い、主上こそこの満たされぬ思いの形見であられるが、（* 挿入部終了）

主上御自身はこのことの仔細をゆめにも御存じになつていらつしやらないのを、宮はおいたわしくお思いになり、これだけがとけがたい執念として亡き後にもお心がかりとなりそうなお氣持がなさるのであつた。^⑩

- (7) She was thirty-seven years old, but seemed much younger. The Emperor, as he looked at her, was overwhelmed by pity and regret. That just as she was reaching an age when she would need his care, she should, unknown to him, have passed through months of continual suffering without once having recourse to those sacred expedients which alone might have saved her—this thought made the most painful impression upon him; and now, in a last attempt to rescue her from death, he set in motion every conceivable sort of ritual and spell. Genji too was dismayed at the discovery that for months past she had been worn out by constant pain, and now sought desperately to find some remedy for her condition. But it was apparent that the end was at hand; the Emperor's visit became more and more frequent and many affecting scenes were witnessed. Fujitubo was in great pain seldom attempted to speak at any length. But lying there and looking back over the whole course of her career, she thought that while in the outward circumstances of life few women could have been more fortunate than herself, inwardly scarce one in all history had been more continually apprehensive and wretched. The young Emperor was of course still wholly ignorant of the secret of his birth. In not acquainting him with it she felt that she had failed in the discharge of an essential duty, and the one matter after her death in which she felt any interest was the repair of this omission. ^㉑
- (7) She seemed much younger than her thirty-seven years. It was even sadder, because she was so youthful, that she might be dying. As she had said, it was a dangerous year. She had been aware for some weeks of not being well but she had contented herself with the usual penances and retreats.

Apologizing for his negligence, the emperor ordered numerous services.

Genji was suddenly very worried. She had always been sickly, and he had thought it just another of her indispositions.

Protocol required that the emperor's visit be a short one. He returned to the palace in great anguish. His mother had been able to speak to him only with very great difficulty. She had received the highest honors which this world can bestow, and her sorrows and worries too had been greater than most. That the emperor must remain ignorant of them added to the pain. He could not have dreamed of the truth, and so the truth must be the tie with this world which would keep her from repose in the other. ㊦

以上の六つの文章の中で傍線・下線部は原文の「限りあれば、ほどなくかへらせ給ふも、悲しき事おほかり」の一節である。この中で「限りあれば」に注目して、日本語の現代語訳と二つの英語訳をみてみよう。古文の原文を読解する場合、専門家は古文のままに理解することができるのであろうか。私の場合は無意識にたとえば、「いづれの御時にか……」一節でも「いつの帝の御代であったか……」と頭の右脳か左脳かで自然におきかえる作用がおこなわれていて、理解している。しかし、難解な古語や特殊な言い回しなどは、古語辞典、その他により調べて初めて理解が可能となる。したがって、日本人といえども、古文は読者の頭・心・気分・知識によって、いったん現代語化されて、読解しているのである。従って、ニュアンスの差はあれ、古文の現代語訳のプロセスとしては、外国語の翻訳の場合と本質的には変わらないと、今回の仕事により実感した。さて、「限りあれば……」にもど

り、テキストの解説にかえり、考えてみる。

晶子訳では「高貴な御身は御病母のもとにも長くはおとどまりになることができずに間もなくお帰りになるのであった。悲しい日であった。」としている。谷崎訳では「限りのあることなので、ほどなく還幸なさいますにつけても、悲しいことが多いのでした」としている。円地訳では「行幸には定めのあることなので、しばらくお見舞の後に帝はお帰りになったが、それにつけても悲しいことが多かった。」と、二者三様である。「限りあれば、ほどなくかへらせ給ふも……」とは、「帝皇であるので、御見舞なされても際限があるから、何時までも付いて居て、看病なさる事もままならず冷泉帝は間もなく……」と古典大系本の上注に、丁寧な説明がされている。晶子・円地訳では表現は異なるが、この時代からすでに宮廷の制度・習慣・行動の規範が確立されていて、天皇は親子の情にひたつていられない状況になっていることを読者は察するのである。谷崎訳では「限りのあることなので……」としか述べられていない。読者には自明のことなのだという、谷崎の認識であろうか。

一方、英語訳の Waley 氏は、*“But it was apparent that the end was at hand; the Emperor’s visits became more and more frequent and many affecting scene were witnessed.”* としている。「限りあれば……」を *“the end was at hand”* 最後が近い、残された命に限りがある、すなわち間もなく、死をむかえることを予想して、ととっている。であるからこそ、帝は度々お見舞して、母子の別れを惜しむ感動的な場面がみられる、と訳されていて、まことに人間的な息子としての帝と、若く、美しい母の最後の状況と読者は納得したのであろう。Waley の時代の英国の王室はこのような人間的で、普通の人々のように別れの悲しみにひたつていことが許される状況であったのであろうか。

続いて、Seidensticker 訳では *“Protocol required that the emperor’s visit be a short one.”* とおまじく簡潔であ

る。“Protocol”の一言で、平安朝の皇室の規則・規範がすでにこの時代に確立されていて、帝と母宮といえども、
というか高い身分であるからこそ、規則・規範を順守しなければならないのであろう、と読者にしらせてくれ、続
く“*He returned to the palace in great anguish.*”で、帝のつらい気持ちを英語圏読者も想像し、共感しえたであ
らう。

次に、表面的に行数をみていってみよう。内容を読まずとも、行数の点で円地訳には挿入部が10行におよんでい
る。すなわち、円地訳では原文を訳した部分4行+10行、晶子訳は2行、谷崎3行、Waley 9行、Seidensticker 3
行と、円地訳のふくらませ方は特徴的である。

単純に、行数、言葉数でいうと、逐語訳をした場合、現代日本語を英語訳したとき、行数は倍になることが多い。
古文を現代語訳する場合であつても、すつきりと言葉数を揃えようと、むしろ意味不明になってしまう。内容をわかっ
てもらふためには、やはり語数がふえてしまう。したがって、俳諧の場合など、一例をあげると、「梅若菜まりこの
宿のとろろ汁」^④など、現代の俳句に無関心な人にはさっぱりわからない。そこで、梅の若菜の時期にこれから旅を
するあなたは、まりこの宿をおとずれたとき、そのこの名物のとろろ汁を召し上がってはいかがですか、と芭蕉翁が
東におもむく弟子へのはなむけの発句である、というやや長々しい解説をしなければ、まりこの宿から離れた地域
に住む現代の大学生にもわからない。九州地区と東京の日本文学を主専攻とする学生にアンケート調査を数年前に
試みた。日本語内でも十七文字では処理できず、多くの語数にたより、説明しなければならぬ。日本語対ヨーロッ
パ語の場合も同様である。

そのような日本語対英語のケースではなく、明らかに円地訳では円地特有の人物造型が見られて、古典翻訳と現
代作家の作品との関係が推察できた。谷崎源氏と作品との関係はすでに多くの諸氏により語り尽くされ、研究され

ている。円地訳と円地の創作作品との関係も研究論文などもみられるが、私の気がついたことを、再度考察してみた。

円地訳からさきに引用したところよりも前の巻をめぐり返し、また重ねて頁をめぐっていくと、いつかかんしていることがある。『源氏物語』中の女性たちで紫の上や葵の上についての条では、テキスト通りといえる。ところが、源氏君をめぐる年長の女性たちの源氏を想う気持ちや、タブーの恋、禁じられた恋を描くときに、挿入部分が増え、一層禁じられた恋の興趣を深める。

「帚木」の巻の空蟬が源氏に逢い、その後の二人について記されている条にその傾向が示されているので紹介してみよう。原文では

御文を、もてきたれば、女、あさましきに、涙も出で来ぬ。この子の、思ふらん事も、はしたなくて、さすがに御文、おもがくしに広げたり。いと多くて、

「見し夢をあふ夜ありやと嘆くまに目さへあはでぞ頃もへにける

寝る夜なければ」

など、目もおよばぬ御書さまも、目もきりて、心えぬ宿世、うちそへりける身を、思ひ続けて、臥し給へり。^⑤

円地訳では

(略) 仰せつけどおりにお文を持って来たので、姉君は呆れて、涙さえ眼に溢れた。

この子が何と思うかしらと考えるさえ恥ずかしく、でもさすがにお文はすぐに顔を隠すようにひろげて読んだ。思いのたけを書き尽し給うた中に、
みし夢をあふ夜ありやと嘆くまに

目さへあはでどころも経にける

ほんとうに「寝る夜なければ」ですなどと、眩しいばかりの見事な御手蹟さえ涙に眼が霧りくもつて半分も読みきれないのだった。

続く部分は完全に円地の手による創作挿入部で、空蟬の心情が語られている。

* 昨日まで、いやつい今の今し方まであの夜の光る君のことを心に偲びつづけてい、そのままお便りのないのを、摘み捨てられた野草の花のように恨めしく、わが身をわびしく情けなく思っていたのであったのに、こうしてひたぶるに恋心を訴えて、弟を仲立ちに文を通わせ、又の逢瀬を契ろうと語らいかけられてみると、女はおし迫ってくる男君のわりない情念が恐ろしく、身を守り門を閉ざす姿勢になるのである。あの若く美しい尊い生れの眩しい人に、かりそめにも恋された喜びに自分はどうしてわれを忘れて酔い痴れられないのか。

それはただ、伊予の介を恐れたり、世間の聞えを怖じたりするためばかりであろうか。いえそうではない。それだけだったら、自分があんまりみじめでやりきれないだろう。あのことのない前であつたら、私は、ただそれだけのことで自分を守る楯にしてその陰に必死に身を隠したかもしれない。でも今の私はあの方を知ってしまった。この世には、このように美しく、あでやかに、匂いみち、光り満ち、時に明らかな憎悪や苦痛を伴う烈しい闘争さえも、管絃の奏楽の高潮した時のような快い恍惚と麻痺のうちに、冷たい花びらの渦の中に眩暈し、やがて底もなく静まりかえる喜びにいつしか置き替えられる不思議さがあるとは、あの夜まで誰が思いもよけたらうか。

私は、私にあのような花渦の中の眩暈をみせて下さったあの方を明らかに恋しはじめている……恋しているからこそ、あの方のおっしゃるようによやすやすとは振舞えないのではないか。

この私が、もう二度と昔の伊予の介の妻に返れない遙かな境に連れ去られて来てしまったことも、私自身が誰よりもよく知っている……辛い、あやしい宿世の縁にあやつられていくわが身よと思いつづけて、お文を胸に抱いたまま女は横になっても、その夜はよもすがら眠りかねた。^⑩

原文の「心えぬ宿世、うちそへりける身を、思ひ続けて、臥し給へり」という一行がこのように、長く言い尽くされている。

因みに、『晶子源氏』をも参照してみよう。

源氏の手紙を弟が持つて来た。女はあきれて涙さえもこぼれてきた。弟がどんな想像をするだろうと苦しんだが、さすがに手紙は読むつもりらしくて、きまりの悪いのを隠すように顔の上でひろげた。さつきからからだは横にしていたのである。手紙は長かった。終わりに、

見し夢を逢ふ夜ありやと歎く間に目さへあはでぞ頃も経にける

安眠のできる夜がないのですから、夢が見られないわけです。

とあった。目もくらむほどの美しい字で書かれてある。涙で目が曇って、しまいには何も読めなくなって、苦ししい思いの新しく加えられた運命を思い続けた。^⑪

原文と比較すると、行数では原文の6行に対して、『晶子源氏』では8行でそれほどに語数を加えていないし、円地訳の見事な長い心理分析・独自の創作加入部分もなく、原文に即している。

ふたつの英訳はいかがであろうか、併記してみよう。

A. Waley はNOTの通りである。

(望) he was so young that he made no effort to understand it, and without further question carried back a letter from Genji to his sister.

She was so much agitated by the sight of it that she burst into tears and, lest her brother should perceive them, held the letter in front of her face while she read it. It was very long. Among much else it contained the verse 'Would that I might dream that dream again! Alas, since first this wish was mine, not once have my eyelids closed in sleep.'

She had never seen such beautiful writing, and as she read, a haze clouded her eyes. What incomprehensible fate had first dragged her down to be the wife of Zuryo, and then for a moment raised her so high? Still pondering, she went to her room.⁽²⁾

蝶さし' Seidensticker 蝶さし°

Genji gave him a letter for his sister. Tears came to her eyes. How much had her brother been told? she wondered, spreading the letter to hide her flushed cheeks.

It was very long, and concluded with a poem:

"I yearn to dream again the dream of that night.

The nights go by in lonely wakefulness."

"There are no nights of sleep."

The hand was splendid, but she could only weep at the yet stranger turn her life had taken.^⑩

ふたつの英訳を比べると。Waley 訳は11行であるが、はじめに略と記したように、一パラグラフが長い。参考にした『古典大系』の読みに共通しているが、一九九三年版の『新日本古典文学大系』では、『晶子源氏』、『円地源氏』、Seidensticker 訳と同様な読み方である。意味内容としては、Waley の 'What incomprehensive fate had first dragged her down to be the wife of a Zuryo……、は非常にわかりやすいが、空蟬はあまりにも、伊予介の後妻の地位にこだわり過ぎる打算的な女性と読まれてしまうのではないだろうか。読者に想像させる含みとか、こころ余りて、言葉足らずな表現の方が逆に、英語圏読者にも共感させることもあるのではないだろうか。

この意味で、円地訳も過剰ともいえるほどの、心理描写や心象風景が加筆されていて興味深い部分が多々あり、枚挙にいとまがない。

終りに

約三十余年前に、参考にした日本語の現代語訳の三種と、英訳を当時の参考文献にあわせて、『新日本古典大系』や、その他の文献等もたよりに、再び読みかえした。三年位前に、講談社のPR小冊子『本』に竹西寛子氏が和歌についての文章シリーズを連載されていたとき、(平成十四年十一月『贈答の歌』として、現在すでに出版されている『円地源氏』にふれられている。当時、書店の店頭には瀬戸内寂聴氏の『源氏物語』が山積みになされてまた、関連する宣伝メディアもはなばなく、いささかにがにがしく評する雰囲気もうかがえる頃であった。

竹西氏は『本』のエッセイの中で約三十年前に出版され、移り変わりの激しいメディアの世界ではすでに過去の

ものになっていた、円地文子訳の敬語・謙讓語など言葉の美しさを高く評価されていたことが強く印象に残っている。これは古典の現代語訳に際して、原文を読んで、助動詞等により身分の違いが表現されていることを確実に読み分けることができていたか、どうかの大切な分かれ目でもある。谷崎訳の助手をされた伊吹和子氏は谷崎訳では「けり」を訳分けできなかった、とおっしゃっている。谷崎訳で見られる「です」「ます」調や、「ありませなんだ」とか、「よく」といわずに「よう」というような上方言葉は谷崎訳の一つの特徴としている。

円地訳は竹西氏が感心されているように、私などには耳に心地よく響く、自然な感じの丁寧語・敬語・謙讓語が用いられている。他の方―二・三種の日本語現代語訳には、各行に「お」（御）が乱用されている。敬語の類は「お」ですますような、日本語感覚の持ち主が作家とは、と慨嘆しながら読まされる現代語訳もある。

それと同時に円地の作品を辿っていくと、『源氏物語』訳以前と以後とでは、明らかに作品における人物描写の違いが目につく。代表作といわれている、自伝的作品『朱を奪ふもの』『傷ある翼』などを、『現代語訳源氏物語』以降の作品と比較すると、明らかに違いがみられる。現代語訳は昭和四十二年に始めて、四十七年九月から四十八年六月に書いて完了したという。昭和四十六年一〇月に発表し、新潮社文学大賞を受賞した『遊魂』にも如実であるし、その後の作品に登場する女性たちで、年上の女性と若い恋人、また想い人との関係における、女性の心理描写・心情の動きなどは現代語訳『源氏物語』で試みた、加筆・創作部分の表現と共通するものがみられる。

The Tale of Genji をめぐって再読しはじめた小論も、フランス語・ドイツ語訳への言及に及ばず、むしろ日本語現代語訳への関心に多くをさいて、制限枚数をこえてしまいつつある。巷間、話題になっている丸谷才一氏の『輝く日の宮』（講談社、二〇〇三年六月発行）は題名からもわかるように、いうまでもなく、氏の『源氏物語』論である。というより、氏の古典論で、女主人公に『古今集』から『源氏物語』、芭蕉から鏡花までを論ずる才女の国文学

者という設定をしている。その相手は世界をまたにかけて水を扱うビジネスマンで、文学とは無縁の人といいながら、サミュエル・コールリッジの『老水夫譚』の一節を暗唱する。女主人公は鏡花を論ずるのに、同世代作家として、ヘンリー・ジェイムスに言及して、『ねぢの回転』論に及ぶような才女である。この女主人公の推論として、現在残っていない、幻の「輝く日の宮」の巻は道長が削らせたということ、作中物語の中の二人の対話として語っている。丸谷氏の新作を読み、刺激された読者は多いことであろう。

古典の現代語訳は『源氏物語』に限らず、他の物語・詩歌であっても、訳者の生きていた時代を表す産物といえる。また、訳者自身の翻訳作業をおこなうまでの教養や文化的背景・生活感覚、これらによって自ずと身についた言語感覚を示すものと、いうことが今回の *The Tale of Genji* をめぐる再読により実感した。丸谷氏の新作に描かれているような、日本の古典から現代、アメリカ生まれで、広くヨーロッパもふくめてモダニズムの先駆者のヘンリー・ジェイムスを論ずることの可能な日本文学研究者は私の知る限りではないように思う。むしろ、このような存在が活躍できる場が初めから、認められないという風潮が一般的であろう。しかし、これこそ、小説の面白さであろう。たとえば、学界の偏狭さを熟知していても、現代作家にとっても『源氏物語』は小説手法の実験を促しながら、古典が時空をこえて存在し、魅力をもつ源泉であることが再確認された、といえよう。

註

- ① 全訳 源氏物語 与謝野晶子 訳 (上巻) 角川書店 昭和63年6月 (39版) 一四四頁
- ② 源氏物語 一 日本古典文学大系 山岸徳平校注 岩波書店 昭和47年2月 (16刷) 一八四頁
- ③ ②に同じ、三四頁

④ Murasakishikibu *The Tale of Genji* translated by Edward G. Seidensticker Alfred A.Knopf New York 1976, volume 1, p.

xi

- ⑤ ④に同じ、p.vv
 ⑥ 前掲書②に同じ、二卷 二二四頁
 ⑦ 前掲書①に同じ、五六四頁
 ⑧ 前掲書⑥に同じ、二二八〜二二九頁
 ⑨ ①に同じ、五六二頁
 ⑩ 谷崎潤一郎新訳 源氏物語 中央公論社 昭和四二年、一〇一〜一〇二頁
 ⑪ 円地文子訳 源氏物語 卷四 新潮社 昭和47年12月、二六頁〜二八頁
 ⑫ Lady Murasaki *The Tale of Genji* translated by Arthur Waley, The Modern Library, New York, 1960, p.372
 ⑬ ④に同じ、p.338〜p.339
 ⑭ 拙論「英訳歌仙抄」『人文学研究』第5輯、福岡女学院大学人文学研究所 二〇〇二年三月 一〇四頁〜一〇五頁
 ⑮ ②に同じ、一〇二頁
 ⑯ ⑪に同じ、一二〇頁〜一二二頁
 ⑰ ①に同じ、六八頁〜六九頁
 ⑱ ⑫に同じ、p.43〜p.44
 ⑲ ④に同じ、p.45〜p.46